

接続表現と列挙の文章構造の関係（２）

著者	木戸 光子
雑誌名	文藝言語研究．言語篇
巻	40
ページ	41-55
発行年	2001-10-31
その他のタイトル	Relation between Connectives and Discourse Structure in Enumeration (2)
URL	http://hdl.handle.net/2241/9844

接続表現と列挙の文章構造の関係（2）

木 戸 光 子

1. はじめに

本研究の目的は、留学生のための効果的な作文教育の基礎研究として、日本語学習者と日本語母語話者の意見文の文章構造と表現を比較し、日本語学習者に意識されにくい日本語の文章構造や表現の特徴を明らかにすることである。留学生の作文指導の際、一文だけを見れば文法的に間違いがないのに、文章全体からは日本語らしくない印象を受ける文章がある。これは、一文や連文の誤用分析の限界で、文章全体から見た文章構造や表現効果の分析が必要である。

木戸（1999）では、接続表現想定調査を行い、日本人学生と留学生に列挙を含む文章に接続表現を入れてもらい、理解の面から文章構造のとらえ方を見た。本稿では、作文調査を行い、添加の接続表現の序列を表す「まず」「つぎに」を使って意見文を書いてもらい、表現の面から文章構造のとらえ方を見ていく。

2. 添加の接続表現と列挙

添加の接続表現については市川（1978）に従い、次のように分類した。

接続詞の分類

順接・逆接・添加・対比・転換・同列・補足

添加－前の内容に付け加わる内容を導く

〔累加〕そして・そうして

〔序列〕ついで・つぎに

〔追加〕そのうえ・それに

〔並列〕また・ならびに

以下、列挙を含む文章例を2つあげる。(下線は筆者が後で引いたもの)

例1 列挙を含む文章

(略) 輸出規制は対外的にも問題が多い。まず、規制策によって一時的にも輸出を抑えとしよう。変動相場制下ではドル高・円安はさらに進むはずだ。放置すれば輸出がふえるので、規制はやめられない。ドロ沼だ。

次に問題なのは、輸出品の高価格化。そして、そのツケは相手国の消費者に回ることだ。(以下略)

(「支持できない輸出規制論」『朝日新聞』1985年8月17日朝刊)

例2 列挙を含む文章

(略) 来年度の予算編成の焦点の1つは、いうまでもなく防衛費の取り扱いだ。概算要求は前年度比7%増となっているが、われわれは思い切った削り込みが必要と考える。

まず、防衛予算の突出がここ数年つづいた結果、ほかの政策経費とのバランスが明らかに崩れ出した事実を指摘したい。(中略)

次に、円高ドル安が防衛費の削減に効いてくる状況の変化がある。(中略)

また、訓練などに使う油代は概算要求の時点で750億円。これまた円高の効果や原油の値くずれ現象によって、ざっと100億円は浮いてくると財政当局はみている。(以下略)

(「防衛予算を抑えよ」『朝日新聞』1985年12月16日朝刊)

例1は「まず」「次に」といった添加の接続表現のうち序列を表す接続表現を用いて2つの問題点を列挙している。例2は「まず」「次に」に加えて、「また」という添加の接続表現のうち並列を表す接続表現を用いて、防衛費削り込みの必要性の論拠となる3つの事実を列挙している。

このように列挙の内容を添加の接続表現を用いて表す文章はしばしば見られる。留学生向けの日本語教科書や日本人学生向けの文章表現教科書、さらには新聞の社説やコラム記事、学術論文等に出てくる。しかし、作文の中で効果的に使われているかなど検証はなされていない。本稿では、日本人学生と留学生に対する作文調査を通して、列挙内容を添加の接続表現を用いて表された意見文の文章構造を分析していく。

3. 作文調査

3. 1 調査の仮説

作文調査の文章の仮説を次のように考えた。

文章の種類は意見文である

文章構造の類型は双括型、頭括型、尾括型が多い(木戸1992)

複数の論拠(特に賛否の理由)を列挙する

列挙の際に添加の接続詞「まず」「つぎに」を使用する

(文章構造の型) (はじめ → な か → おわり)

頭括型 [主張] → [] → []

中括型 [] → [主張] → []

尾括型 [] → [] → [主張]

双括型 [主張] → [] → [主張]

散括型 [主張] → [主張] → [主張]

無括型 [] → [] → []

(木戸1992より引用。寺村・佐久間・杉戸・半澤編1990参照。)

図1 文章構造の型

さらに、次のような文章構造の類型の仮説を立てた。

(はじめ) → (なか) → (おわり)

「双括型」 主張 → 論拠の列挙 → 主張

「頭括型」 主張 → 論 拠 の 列 挙

「尾括型」 論 拠 の 列 挙 → 主張

図2 作文調査における意見文の文章構造の型の仮説

3. 2 調査概要

3. 1の仮説に基づき、作文調査を次のように実施した。

題「4月入学と9月入学とどちらのほうがいいか」

実施年：1999年

対象：大学および大学院留学生 計28名¹

中上級日本語レベル（日本語能力試験1，2級合格程度）

日本人学部大学生 計27名

方法：授業時に簡単に調査趣旨を説明し、調査用紙を配布する。

B5紙1枚に作文を書くようにし、持ち帰って書いてもらい、1週間後授業時に回収または郵送で回収する。

作文のテーマ

「4月入学と9月入学と、どちらのほうがいいか？」

現在、日本の学校は、小学校から大学まで4月入学になっています。他の国では9月入学のほうが多いそうで、日本でも時々9月入学のほうがいいのではないかと議論されています。

日本の場合、4月入学と9月入学とでは、どちらのほうがいいと思いますか。あなたの意見を書いてください。

<!!重要!!> 書くときは、「まず」「つぎに」ということばを必ず使ってください。

それから、よこ書きにしてください。

図3 作文調査の指示文

4. 調査結果

4. 1 文章構造の型

作文調査の結果は以下の表1のとおりである。

留学生11名、日本人学生19名が双括型で書いており、留学生、日本人学生とも最も多い。以下、双括型>尾括型>頭括型の順で少なくなっている。中括型と散括型で書いたのは留学生のみで、日本人学生にはいなかった。

双括型、尾括型、頭括型については、予想どおり図2で挙げた仮説のような文章が出てきた。以下、双括型と頭括型の作文の例を挙げる。（例の中の下線は筆者が後で引いたもの。____は添加の接続表現、~~~~は文章全体の主張とな

表1 留学生と日本人学生の作文の文章構造の型

	双括型	尾括型	頭括型	中括型	散括型	計
留学生	11	9	4	3	1	28
日本人学生	19	5	3	0	0	27

る賛否の意見を表すところ。)

例3 双括型の作文 (留学生)

4月入学と9月入学と、どちらのほうがいいかというのは、その国の季節、民族性などを大きく関連があると思っている。日本の場合、9月入学より4月入学のほうが良いと思う。

まず、日本では、春、夏、秋、冬の四季がたいへん区別しやすい国である。また、春と言えば、一年の中で最初の季節である。気温が暖かくなっているし、花があちこちを咲いている。その季節に、入学だけではなく、入職、転職が一番いい時期だと思う。

つぎに、現在、多く国では、9月入学のほうが多いそうで、日本では、めずらしく4月入学である。そのかけと、留学したい方にとってタイミングがちょっといいだと思ふ。なぜなら、自本の国で3月に卒業して、半年ぐらい余裕を持て、9月になったら、他の国に留学を行ける。もし、留学するのに、半年以上を待つと、時間をもったいないだと思ふ。

他の国と比べると、確かに、9月入学のほうが多いかもしれないが、日本の場合、9月入学より4月入学のほうが良いと思う。

例4 双括型の作文 (日本人学生)

私は、4月入学のままでいいと思います。その理由は2つあります。

まず、一つ目に、日本は四季がはっきりと区別できる風土の国で、春の桜が咲くなかでの入学式は、長い間続いてきた日本の習慣で、日本人の心に何か思いをのこすものだからです。私は、たとえ他の多くの国とちがっていても、日本でのやり方を大切に守っていきなうと思ふのです。

つぎに、二つ目の理由を述べます。他の多くの国と異なる事で問題となるのは留学などをする時に日本とづれているために半年間、新学年が初まるのを待つことになったり、することではないでしょうか。でも、それはかえって準備のために利用できる、有意義なものとなるのではないかと思ふのです。

以上の点から、私は日本の4月入学の制度は、このままでよいと思います。

例 5 頭括型の作文（留学生）

日本の場合は、9月が暑いので新学期の始まりの礼式は耐え難いと思いますが、日本でも9月入学のほうがいいと思います。

まず、9月に、桜がきれいですし、桜をみれば、学生の気分がよくなるかもしれません。

次に、新学期の始まりは9月だったら、皆の学生は元気いっぱいです。大自然のもので休暇を過ごせば休み明けに、確かに、皆は精力と気力旺盛だと思います。

第三に、夏休みは学期の末だったら、新学年の前に、前学期の時に困難があった学生は、学習の動機付けを持つようになるかもしれません。

例 6 頭括型の作文（日本人学生）

私は4月入学の方がよいと思う。

その理由としては、まず気候がある。寒い季節が終わり、様々な動植物がその活動をはじめ春は生命力にあふれている。暑くも、寒くもないこと季節はものごとをはじめのに大変適している。

つぎに、日本人が昔から好む「桜」が咲くころでもあり、祝い事をさらにめでたくなる。これは私がずっと日本で育っている（さらに入学式＝桜ということが可能な地域で）からかもしれないが桜のない入学式は考えられない。

4. 2 尾括型の作文

双括型、頭括型の作文が留学生、日本人学生ともに文章構造が比較的はっきりしているのに対し、尾括型の作文は多様性に富んでいる。以下、留学生と日本人学生の尾括型の作文を比較する。

日本人学生の尾括型の作文は列挙する論拠が何を表すのかはっきりしており、尾括型の文章構造が明確である。「まず」「次に」という添加の接続詞を使う際、以下に挙げる例7～例10のように「メリット、デメリット」「利点」「良い場合の条件」「理由」といった論拠を明確にする表現を用いている。（例の中の下線は筆者が後で引いたもの。____は添加の接続表現、_____は論拠を明確にする表現。）

例 7 尾括型の作文（日本人学生）

4月入学、9月入学、どちらにもメリット、デメリットがある。まず、日本で伝統的な4月入学は、日本での入社時期と同じであり、小・中・高・大・そして、会社へとスムーズに所属の場が移ることができるようになっている。しかし、国際化

が進む今、留学したり、留学生を受け入れたりすることが多くあるが、その場合、9月入学で統一した方が、勉強面での負担は少なくなる。筑波大学でも、帰国子女を9月入学で受け入れているが、日本での勉強についていくために半年分の補習を受けている状態だ。

次に、4月入学は日本の文化にあったものである。他国に合わせて9月入学にすることは便利にはなるかもしれない。だが、日本人の心をつぶしてしまう気がして、ゆずる必要はないと思う。日本には四季があり、日本人はそれを大切にしてきた。4月、春は全ての始まりの時期であり、つらく厳しい冬を越え、気持ちを新たにスタートする時なのである。

大学の時期について考える場合、他国との関係を考えるべきだとも思うが、日本としての文化や4月入学という事実の奥にあることを考える必要がある。日本人の心を感じて、私は4月入学の方が日本には良いと思う。

例8 尾括型の作文(日本人学生)

4月入学と9月入学とでは、どちらの方が良いか、といっても、様々な条件下では双方に利点がある。まず、4月の方が良い場合の条件としては、入学試験が現在日本での主流である。2～3月の時期に行われる場合である。次に、9月の方が良い場合の条件としては留学をしようと考えている場合である。

しかしこの特別な場合の条件づけを無視して日本での生活スタイルのみを考えてみると、やはり新しい生活のスタートは、花のつぼみが開いていき、新しい命のパワーみなぎる春が一番日本においては似つかわしいように思う。9月といえば自然界における休息の時または忍耐の時である冬の支度をする秋を向かえる時期である。

四季の移りかわりに命のサイクルを読みとる日本の文化の中では、やはり4月入学がふさわしいように思われる。

例9 尾括型の作文(日本人学生)

今、日本の学校は4月入学という制度になっている。4月入学と9月入学のどちらが良いかという問題について、それぞれの利点を挙げ、どちらが日本の学校に合うか、検証してみたいと思う。まず、1月入学についてだが、1月入学の利点は、日本の企業や政府が4月からを新年度としているため、卒業・入学・就職等がスムーズに行えることである。また、我々は生まれた時からこの4月新年度制に慣れてしまっているので、4月入学のほうがなじみやすい。

つぎに、9月入学の利点といえば、9月入学の諸外国との入学・転学の際に、学年や手続きの面がよりクリアになることである。また、4月入学では受験は1～2月だが、9月入学では6、7月になり、日本では初夏・夏にあたる。気分的な問題だが、夏に受験をするほうが冬よりも気候のせい、なんとなく気が楽なような気

がする。しかし、9月入学は、日本で採用されていなかったため新たに採用しようとする、不都合な点が生じる。また、長期休業はどの時期にとれば良いのかという問題もあるだろう。新年度の前に7、8月の2か月休みをとるのか、それともその時期は1か月だけにし、冬休みを長くとるのか、気候を考えると前者だろうが、新年度の前に2か月も休業があるのは、日本人の国民性を考えると、志気が鈍るため、あまり望ましくない。

以上のことを考えあわせると、日本では今のところ4月入学のほうが良いのではないかと思う。しかし、今度国際化がより進み、国家間の整合が行われるようになれば、全て9月に整合するのもそれはそれで良いと思う。

例10 尾括型の作文（日本人学生）

世界には大きく分けて4月入学の国と9月入学の国が存在する。日本でも9月入学の方がいいのでは、という声も存在する。日本では4月、9月のどちらの入学がよいのだろうか。まず、4月入学の利点として日本には5月にゴールデンウィークという連休が存在することが挙げられる。人間はだれでも新しい環境に慣れるのには時間がかかるし、その間には不安におちいることもあるだろう。そんな時に、この連休を利用して、かって生活し、慣れ親しんだ環境に戻ってみれば心に抱いた不安も和らぎ、新しい生活をしていく上での大きな支えになると思う。また、新しい生活にすぐにとびこんだ人なら、この連休を利用して、新しい友人、新しい街のことをより一層深く知る絶好の機会になると思う。そして、つぎに9月入学をすすめる理由としては、やはり世界中の多くの国が9月入学であるという点にある。より活発な国際交流がさげられる世の中において日本も世界的な流れである9月入学を目指すことも重要であると思う。9月入学制になれば留学も以前よりも容易になり、その結果として盛んな留学生の交換が行われれば、国と国との文化交流も進み、真の意味でのグローバル化が促進されていくと思う。

以上のように4月入学と9月入学を推す理由を述べてみたが、私個人としてはやはり4月入学の方がいいと思う。日本では4月には桜の花が咲く。そんな桜の花の咲く中を希望に満ちた顔で新しい生活の第一歩をふみ出す新入生たち。日本と桜の花とは切っても切れない縁があるし、そんな桜の花の咲く季節に新しい生活が始まるのは日本人にとっては何かとても大切なように感じるから、私は4月入学を支持したいと思う。

一方、留学生の尾括型の作文では、文章構造の中で列举をどんな論拠を並べるために使うかがあいまいである。例11のように列举する論拠がパラレルな関係でないものを並べていたり、例12、例13のように意見や事実を並べてはいるが、理由、利点といった論拠が明確に表されないため何のために列举してい

るのか論拠があいまいな文章になっている。

例11 尾括型の作文(留学生)

現在、日本の学校は、小学校から大学まで4月入学になっています。他の国では9月入学のほうが多いそうで、日本でも時々9月入学のほうがいいのではないかと議論されています。まず、「どうして日本で4月入学になっていますか」と質問として日本人に問くと「昔しからいつもこのことになってきた、特別の原因ない」と言った。つぎに、日本で4月入学と他の国の9月入学違いから、外国人が日本へ留学するとき、半年違いあるのでとっても不便だ。日本人も他の国へ留学するとき同じと思う。

いま、国際交流がたんたんおこなっている、みんなの便利のために、特別の理由がないので、日本が国際多数の国の習慣に従かうべきと、9月入学したほうがいいと思う。

例12 尾括型の作文(留学生)

みなさんごぞんじのように、現在、世界中の各国では学校は9月入学ですね。しかし、日本の学校は小学校から大学まで4月入学になっています。それで、「どうして日本は他の国とちがいますか」、「4月入学と9月入学と、どちらのほうがいいか?」一緒に考えてみようと思います。私は日本人の友達に聞いて、いくつかの意見をもらいました。まず、日本では4月は春で、寒い冬を過ぎた日本人は明るい春を迎えて、気持ちもよくなっています。または、日本人の考えには、春は一年中の一番いい季節で、春に始まることはいい結果を得るはずです。つぎに、小学校の一年生にとって、4月入学はとても適当です。なぜかという、入学して、少し勉強して、また、夏休みになることは、子供たちが学校にどんどんなれるためです。

ところが、4月入学はいい点があれば、よくない点もあると思います。その中、非常に複雑なのは留学することです。例えば、外国に留学したい日本人の学生だけではなく、日本に留学を目的として外国人は、入学期間に合わないの、待たせられて、本当に困ります。もし、日本でも他の国のような9月入学だったら、留学するチャンスが多くなって、学生にとっていいじゃないですかと思います。

例13 尾括型の作文(留学生)

韓国の場合、3月と8月に新学期が始まるので春と秋の入学だと思うとやはり秋の入学は、韓国では転校とした形でしかないため、よくその意味がつかめない。そのため、春の入学を中心に考えてみると、まず、季節の変化からみて一年の始まりが春、夏、秋、冬という順に変わっていくので、気持ちもその分新しい生活を迎えられるやすいのではないだろうか。それに韓国では春にはすべて(自然を含めて)が

新しく始まって冬になるとその一年をふり返ったり、整理したりして自分なりにまた新年を迎える意識が強いと思う。つぎにこれは東洋と西洋との考え方（価値観）が違った点から生じることだと思われる。西洋では季節に関してどのように考えているのか詳しく分からないので何とも言えないが、東洋での季節に対する態度とそれに従っての気持ちも無視できないのではないだろうか。

以上、留学生と日本人学生の尾括型の作文を比較してきたが、中立的かつ客観的に論拠を挙げた上で意見を述べるという尾括型は留学生には書きにくい文章ではないだろうか。つまり、日本人学生の尾括型の作文である例7～例10は中立的かつ客観的に論拠を挙げた上で意見を述べるという文章であるが、留学生の尾括型の作文には見られなかった。特に、例9のように4月入学と9月入学のどちらがいか検証した上で作文の書き手の主張がなされるという検証する文章はなかった。

ここ数年、特に理科系の作文技術の教科書を中心に、結論を最後に述べる尾括型より結論を冒頭に述べる頭括型の文章を教えるべきだという議論がある。しかし、理由を述べた上で意見を述べるという尾括型の意見文とは異なり、ある話題について賛否を検証するために利点など論拠を客観的に挙げた上で意見を述べるという尾括型の意見文も必要ではなかろうか。検証する文章では結論が先にあるより、「問題提起→論証→結論」というように結論が最後にあったほうが客観的に述べている印象を受ける。

4. 3 文章構造の手がかりとなる表現

4. 2では、日本人学生の尾括型の作文は、何のために何を列挙するか明確で、4月入学と9月入学の利点などを対比させて自分の意見を最後に述べていることを指摘した。一方、留学生の作文は何を対比させ、何を列挙するのかあいまいなまま、事実や意見を並べる傾向があることも述べた。以上の分析から、文章構造の明確化という点において、尾括型は留学生にとっては書きにくい文章構造の型ではないかと予想される。作文調査では尾括型は、日本人学生27名中5名が書いたのに対し、留学生は28名中9名が書いているように、留学生のほうが尾括型で書いた者が多い。それにもかかわらず、作文を分析していくと、尾括型で書いた留学生の作文の文章構造は事実や意見を並べただけといった印象のものが多く、尾括型で書く意味が不明確である。

日本人学生の尾括型の作文と比較してわかったのは、尾括型で書くなら、「論

「の列挙→主張」といった文章展開機能を示す表現があったほうが文章構造の型がはっきり示され、複数の論拠の列挙を添加の接続表現で示すだけでは不十分だということである。

今回の作文調査では、文章構造の手がかりとなる表現として、「まず」「つぎに」という添加の接続表現を使うことを条件としたが、実際に書いてもらった作文を比較すると、添加の接続表現だけではなく、いわゆる「メタ言語的」な表現も文章構造の型の明示に重要な役割を果たすと言える。

「メタ言語」とは、杉戸・塚田(1991)によると「文章の実質的な内容を表さず、文章展開機能を表すだけの文」である。例7～例10の____で示したところで、「メリット、デメリット」「利点」「良い場合の条件」「理由」といった論拠を明確にする表現である。日本語教育の作文教科書では、「関係指示文」(二通・佐藤2000)、「行動を述べる文」(浜田・平尾・由井1997)がこれに当たると思われる。

- a 接続表現で示す
 - b 「メタ言語的」な表現で示す
 - c bと、aまたは指示表現などとの組み合わせ

図4 文章構造の手がかりとなる表現

以下、尾括型と双括型の作文に出てきた中で、列挙内容がどんな論拠を表す表現と、文章末尾にくる主張が結論であることを示す表現を示す。

列挙内容がどんな論拠を表す表現に関しては、下の図5のとおりである。

日本人学生の双括型、尾括型の作文に出てくるのは、24例のうち19例で、うち5例が尾括型に出てくる例である。留学生の双括型、尾括型の作文に出てくる表現は、20例のうち4例で、うち2例が尾括型に出てくる例である。日本人学生の大半が添加の接続表現「まず」「つぎに」などとともに列挙内容がどんな論拠を表す表現を用いているのに対し、留学生はそのような表現をほとんど用いていない。

文章末尾にくる主張が結論であることを示す表現に関しては、図6のとおりである。

	日 本 人 学 生	留 学 生
接続表現 補足		なぜかというと
「メタ言語的」 な表現		
「理由」	理由として その理由として（2例） その理由としては その理由としてあげられるのは その理由としていくつか挙げる事ができます。 その理由は2つあります。 その理由としては2つの点が挙げられる。 その理由を2つの方向から説明する。 その理由をいくつかあげ、それぞれについて説明したいと思います。 その理由としていくつか例をあげたいと思います。 以下にその理由を述べてみます。 しかし、～にも理由がある。	もちろん背景、あるいはいくつかの理由があると思う。
「利点」	ここで～の利点を考えてみよう。 ～の利点として（尾） ～様々な条件下では双方に利点がある。 （尾） ～という問題について、それぞれの利点を挙げ、～検証してみたいと思う。（尾）	
「メリット」 「デメリット」	どちらにもメリット、デメリットがある。 （尾）	これは4月入学の大きなメリットである。9月入学の一番大きなメリットは（尾）
「立場」 「視点」 「意見」	～の立場から考えてみる。～の視点から考えてみる。（尾）	～いくつかの意見をもりました。（尾）

図5 文章構造の手がかりとなる表現

－列挙内容がどんな論拠かを表す表現

（尾は尾括型の作文に出てくる例。それ以外はすべて双括型。）

接続表現	日 本 人 学 生	留 学 生
順接	したがって ゆえに よって	だから(3例、うち2例は尾) ですから 結論的に
同列	すなわち	つまり
転換	そこで(尾)	
指示表現等と「メタ言語的」な表現との組み合わせ	日本人学生	留学生
「理由」	このような理由で こういった理由から 以上のような理由から(2例) 以上2つの理由によって 以上2点の理由から	以上の理由で 上記に書いてある理由で
「点」	以上の点から 以上2点より 以上の2点より	
「こと」	このようなことから考えて 以上のことを考えあわせると (尾)	
「議論」		つまり、上記のいろいろな議論から考えて(尾)

図6 文章構造の手がかりとなる表現
 - 文章末尾にくる主張が結論であることを示す表現
 (尾は尾括型の作文に出てくる例)

日本人学生の双括型、尾括型の作文に出てくるのは、24例のうち16例で、うち2例が尾括型に出てくる例である。留学生の双括型、尾括型の作文に出てくる表現は、20例のうち9例で、うち3例が尾括型に出てくる例である。日本人学生の過半数が文章末尾にくる主張が結論であることを何らかの表現で示しているのに対し、留学生は日本人学生ほどにはそのような表現を用いていない。また、留学生に比べて日本人学生のほうが「理由」など「メタ言語的」な表現を使う傾向が大きい。さらに、同じ順接の接続表現でも日本人学生が「だから」

を使っていないのに対して、留学生では尾括型の作文2例、双括型の作文1例に使われている。つまり、結論にあたる意見を述べる際「だから」を使う例が見られるが、日本人学生には見られない。木戸（1999）でも指摘したが、同じ種類の言語形式でも留学生と日本人学生では使用傾向が異なり、これは学習の際に文章の中での使い方や使用傾向を含めて学習していないために起こる隠れた誤用ではないかと考えられる。

双括型や頭括型は意見や事実を表す文の配列だけでも「主張→論拠の列挙」「主張→論拠の列挙→主張」といった文章構造の型を示すことはできる。しかし、文章構造を明確に示すには、上で述べたような言語形式を用いたほうがより文章構造の型がはっきりすると言える。日本人学生の作文例にそのような文章構造の手がかりとなる表現が留学生の作文より多く見られるのは、文章構造の型を、日本人学生が意識して用いているかどうかは別として、明確に示す傾向があると指摘できる。

5. おわりに

以上、留学生と日本人学生の作文調査を行い、添加の接続表現と列挙内容を含む意見文の文章構造と表現を分析した。多い順に、双括型>頭括型>尾括型と挙げられるが、双括型、尾括型と文章構造の型は同じでも、留学生と日本人学生の作文では列挙内容や結論の示し方が異なっていた。

さらに、今回の作文調査で今後の課題として挙げられるのは、日本人学生の尾括型の作文に、利点をあげた上で意見を述べるという検証を行う意見文が見られたことである。作文の指導の上で、頭括型あるいは双括型のような結論を冒頭に述べる文章を奨励する動きがあるが、客観的な検証として意見を述べる場合、尾括型で書いたほうが表現効果が高い可能性も考えられる。意見文だからといってどんな文章も同じ文章構造の型で書くのではなく、同じ意見文でも目的によって文章構造の型を選んだほうがよいことを示唆する事実として興味深いことである。

注

- (1) 留学生の国籍は次のとおり：中国10名、韓国4名、台湾2名、モンゴル2名、マレーシア（母語マレー語）2名、タイ、インドネシア、ベトナム、オーストラリア、フランス、アメリカ、アメリカ・イスラエル、不明が各1名。

参考文献

- 市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 木戸光子（1992）「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究55』表現学会 pp. 9-19
- 木戸光子（1999）「接続表現と列挙の文章構造の関係（1）」『文芸言語研究言語篇36』筑波大学文芸・言語学系 pp. 69-87
- 木戸光子（2001）「日本語教育におけるアカデミックライティングの試み」『日本語教育論集16』筑波大学留学生センター pp. 121-132
- 杉戸清樹・塚田実知代（1991）「言語行動を説明する言語表現」『国立国語研究所報告103』国立国語研究所
- 二通信子・佐藤不二子（2000）『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
- 寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編（1990）『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版

付記 本稿は平成13年度日本語教育学会春季大会における口頭発表の内容に加筆し、修正を加えたものである。なお、本研究は平成11年度および12年度筑波大学学内プロジェクト奨励研究「留学生の意見文における文章構造と表現効果の研究」の助成による研究の一部である。